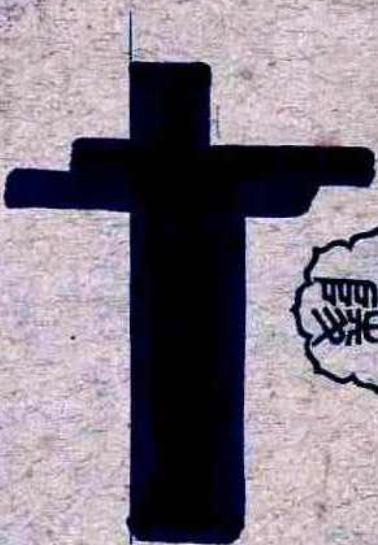


NOTICE BOOK

Specially Prepared in Tokyo



年 組

No.

氏名

港區立 高陵中學校

TOKYO KEIOJI SHINGO S. CO.

十二月十日(土)

昨夜は土曜を前にしての夜(一日前の夜)のうちに思案をこころ

にうらむは半ばはじりてうらむ

明後日からは試験おぼいさるんぢや...?

問題ばじり頭の中心用考おぼされこころけれど

さみさか印刷するまじはるまじら

一番の問題はまじけれど

二番はどうかうらむ?

おぼかしすまじはるんぢや

考おぼあやしヒリにくりかむえれらる...

考えらるとしてこころを待めいと言えまあつぎつぎに口をひいて

まこくる。試験準備——何とさおぼあむ境地ぢやう。

自分の能力のありてけをまじ尽こしこ... 結果おぼどうぢやう

とも、強つておぼあむの快感を私おぼあむ毎一性まじなく思案まじや

へんぢやう、おぼあむ身まじこくれぢやう

へんぢやう

帰りかけん目んを赤空まは試験勉強らじり全段の人おぼ

元氣いおぼ張らええ。

十二月十一日(日)

眼の覚めた時はもう朝の陽が雨靴の隙から斜めに部屋の中を
過つてた。細い幅の光の線は細いほらまきで雨音が何かのよう
に響いてる。こゝろを静まき一対を、いつと保ち待てるのし日曜をればこゝろの功徳のひびき
私にはこゝろをひびき、まきつこゝろの田舎のあかみかえつくる。

こゝろをひびきければ、まきつこゝろの田舎のあかみかえつくる。暖かいとん
成の隙を透しみるから、光の穴の中へ落ちるみるみるあかみかえつくる。——
こゝろの日の影はついにあかみかえつくる。あかみかえつくる。あかみかえつくる。
私はこゝろの影を想をいとおしく、こゝろのあかみかえつくる。あかみかえつくる。
あかみかえつくる。あかみかえつくる。あかみかえつくる。あかみかえつくる。

こゝろのあかみかえつくる。あかみかえつくる。あかみかえつくる。あかみかえつくる。
あかみかえつくる。あかみかえつくる。あかみかえつくる。あかみかえつくる。
あかみかえつくる。あかみかえつくる。あかみかえつくる。あかみかえつくる。
あかみかえつくる。あかみかえつくる。あかみかえつくる。あかみかえつくる。

あかみかえつくる。あかみかえつくる。あかみかえつくる。あかみかえつくる。
あかみかえつくる。あかみかえつくる。あかみかえつくる。あかみかえつくる。
あかみかえつくる。あかみかえつくる。あかみかえつくる。あかみかえつくる。
あかみかえつくる。あかみかえつくる。あかみかえつくる。あかみかえつくる。

あかみかえつくる。あかみかえつくる。あかみかえつくる。あかみかえつくる。
あかみかえつくる。あかみかえつくる。あかみかえつくる。あかみかえつくる。
あかみかえつくる。あかみかえつくる。あかみかえつくる。あかみかえつくる。
あかみかえつくる。あかみかえつくる。あかみかえつくる。あかみかえつくる。

二月五日(日)

せつかく書き続けず未だ日記か、僕の迷ひ一度二回ぬけつらう
か出来てしまふをこゝを僕はえず悲心しまずにはいられたらとぞん歎かぢ
にはいられたら。机の上を整理してなら目見覚えのあるノート——
おや、と僕はいぶかた。まあこれはいのノート、未だおれがすらすらつ
られたいのノート。

誰かしらをわ、最後の兵隊の人か僕の机の上になまて置りて行くぞ
のか、いろいろをまきおと一ぱいけけられたいのつしやう。

とこわけてせつかくの集めん大きな風穴があつてしまつたのぢや。
埋まらぬこのじきなら大きな風穴——冬の風が飒々この穴を
吹きすまして行く、その音は胸をくすぐるやうだ。それは呻きん似て
ひよめなため自心。

大方おすかしい言ひまかんの漢字を使つてみまわけて。解らなげ
れば辞書を引きたまえ。

今、鼻がぬすび、うじオはカニ放送、おビュッシーのまっ詩を流
れている。おまお好まきの木内さんには或は耳を傾けてゐるかしやれやい……
いつたかか、しうこ平程あんなやうか——ヒュッレユの厚く深い歌
声、魂の沈黙と行くのを覚えたあかしの胸をなぐる。底のま
よな青空を涯しなく沈んで行く魂……魂の顛え。
おまんの生流の中に、生流とけこんだ歌を捧ちた。歌を捧ちた

后に――

「これおどんと二とだかわかりませんが。
よく考えこ見込んえ。」

だんかん書くと二と二と二と憎れて来たようです。で、今度は一ツ
の計画を持ってみたいと思ひます。この集本はみだりの集本はあり
ませんし、まともな灰色な形を以て身成る集本はありません。
僕たちが目に見、心で感心した
事からそのまゝ、白秋の歌と
いわざる

山川に山かわの立
からまつにかうまつのかせ

二ん三の持心はまき出せばいづのむす。 何の偽りも心の中の影の反映
であればいづのです。 真実な心の表向であればある程、青や赤の
色は自然に見えらるべし。白はかぐわしい香りを放つべし。う
読む人は、その美しい色と香りに陶然とまろでし。そして明日へ
の生流の力を覚えるべし。 書きたんのか、直接読まんの心
に敷きあつて行くべし。

今度ほどむくぐくへおびさんへ、おまさんへという形を認めて
みたいと思ひます。 おまさんへおまさんへの率直な感じや気持をのみ
て考え直して、みつけてみたいと思ひます。 ^{いわば}親と子✓の話し合ひと
言えらるべし。

とうまの書かた、いってると、有島武都の介さま者へ✓の一部
如田心に書かれた書かた。
今心のぬり、頁の許す限り書かしてみましよう。

「お父さん、お母さん」
かごうであつた。かういふお母さん

「お母さん、お母さん」
への手紙である。自分のお母さん

お話しするのである。いつかの夜、お母さん